

洗足学園音楽大学

# 邦楽演奏会 「和のいろは」

2021年7月3日（土） 14：00開演（13：30 開場）

洗足学園音楽大学 シルバーマウンテン1F

主催：洗足学園音楽大学・大学院

協力：現代邦楽研究所

△新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防ぐためのお願い

- ・マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。
- ・大声や対面での会話はお控えください。
- ・演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。
- ・休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。
- ・客席内やロビーでのご飲食はお控えください。
- ・出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。
- ・万一、集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。

## 【プログラム】

### 1 「砧三章」 沢井忠夫 作曲

箏Ⅰ…中村 美優 箏Ⅱ…川田 健太 十七絃…吉原 佐知子

### 2 「三絃・箏・篠笛 三重奏曲」 杵屋正邦 作曲

笛…馬 新凱 三絃…染谷 美里 箏…川田 健太

### 3 「津軽三味線とオーケストラのための絃魂」 和田薫 作曲

津軽三味線…染谷 美里 電子オルガン…内海 菜々美 堀田 真菜

休憩 15分

### 4 「生きていてよかった ～十七絃と笛による～」 長澤勝俊 作曲

竹笛…馮 蕊 十七絃…中村 美優

### 5 「福島潟幻想曲」 玉木宏樹 作曲

指揮…松尾 祐孝

尺八Ⅰ（笛）…馮 蕊 尺八Ⅱ（笛）…馬 新凱

三絃Ⅰ…染谷 美里 三絃Ⅱ…稲沢 茉莉

箏Ⅰ…稲垣 美沙 陳 卓

箏Ⅱ…中村 美優 志水 真菜

十七絃…川田 健太 碓井 由希子

## 【出演者】

現代邦楽コース大学院、学部生、卒業生

馮 蕊（院2：笛） 馬 新凱（院1：笛） 陳 卓（院2：箏）

染谷 美里（学4：津軽三味線） 中村 美優（学3：箏） 川田 健太（学2：箏）

稲沢 茉莉（卒：津軽三味線） 稲垣 美沙（修：箏） 平原 愛香（卒：箏）

電子オルガンコース学部生

内海 菜々美（学3） 堀田 真菜（学3）

現代邦楽研究所研究生

碓井 由希子（箏） 志水 真菜（箏）

講師

松尾 祐孝（教授：司会・指揮） 吉原 佐知子（講師：箏）

## 【曲目解説】

### 「砧三章」 沢井忠夫 作曲

第一章と第三章は砧地をとり入れながら、リズムの絡みと流れを軽快に表現していきますが、間に挟まった第二章では、謡曲「砧」をテーマに置いて、秋の終りの寒々とした季節感、三連音による虫の声等、ドラマチックな表現が演奏者に要求されています。また十七弦には箏曲「五段砧」がパラフレーズされここに古典と現代が綾なされます。1962年作曲。〔作曲者〕

### 「三絃・箏・篠笛 三重奏曲」杵屋正邦 作曲

邦楽における三曲合奏形式とは通常、三絃・箏・胡弓もしくは三絃・箏・尺八の楽器編成を示すが、この作品は三絃・箏・篠笛による珍しい編成の作品である。三楽章形式となっており第一楽章は急速調、第二楽章が緩徐調、第三楽章は再び急速調となっている。1947年作曲。[GHコース]

### 「津軽三味線とオーケストラのための絃魂」和田薫 作曲

この作品は、2001年から舞台的な構想に入ったのですが、作曲の動機は、1997年に津軽三味線奏者の木乃下真市氏と出会いまで遡ります。作曲の動機に演奏家の影響を受けることは、そう多くはありません。しかし、木乃下氏の演奏に触れた瞬間、誰にもない音がそこにあり、作曲家としての創作意欲を掻き立てられました。その日から私の脳裏には、木乃下氏とオーケストラの映像が鮮明に映し出されたのです。作曲においてのテーマは、木乃下氏の津軽三味線とオーケストラが共に生み出せるものは何かでした。津軽三味線は、「じょんから節」をはじめ多くの名曲を持ちますが、その真髄は「曲弾き」と言われる即興演奏に他なりません。作曲にあたって多くの時間を費やしたのは、実はこの「曲弾き」と作曲との関係でした。西洋のオーケストラというシステムの中で、津軽三味線を自由に表現する、これがこの作品の主題です。曲は、ホルンのテーマの強奏から始まり、序奏を経て、津軽三味線の独奏。そして「Allegro barbaro (野蛮なアレグロ)」と示されたアレグロ部。第二主題のアダージョ部。そこから「じょんから」とオーケストラの競争部。再び第二主題を再現し、怒濤のAllegro barbaroで曲を閉じます。[CD：鬼神-和田薫の音楽より]

※ 本日はオーケストラパートを電子オルガンにて演奏します。

### 「生きていてよかった ～十七絃と笛による～」長澤勝俊 作曲

記録映画「生きていてよかった」は1955年亀井文雄監督によりつくられました。「あれから10年」というナレーションにより始まるこの作品は、原爆に傷ついた人たちの心の叫びが静かに語りかけてくる感動的な記録映画です。この「命の尊さ」を描いた作品は、日本の映画史に残る名作であり、現代にも生きこれからも祈りに触れ人々の記憶に甦ってくるものと確信しています。「死ぬことは苦しい」「生きることは苦しい」「でも生きていてよかった」というこの言葉の重みは、学徒出陣、スマトラ戦線、戦友の死、抑留生活を体験してきた私にとって、なんとも耐え難いものです。しかし私たちが決して避けて通ることのできない歴史の道であると思っています。私はこの映画のスタッフとして音楽を通じ制作にたずさわる機会を得たことを誇りとし、また心の支えともしてきました。映画での楽器編成はフルート2、ギター1でしたが、この作品では十七絃、笛との二重奏とし、原曲のモチーフの使用を最小限にしました。十七絃と笛にどれほど心をかよわせることができるか、また内面よりの両楽器の可能性の追求等、「いのちの尊さ」というテーマとの接点が重要なポイントだと思っています。宮越圭子 委嘱作品。[CD：Flutist from the East vol.3 西川浩平より]

### 「福島潟幻想曲」玉木宏樹 作曲

この作品は2部構成です。

#### 1. 朝霧

初めて福島潟に行き、幻想的な日の出を目の前にした私の頭の中にはそれこそ、百花繚乱のようにメロディーが沸き起り、それも当然、日本の風景にマッチする尺八メロディーでした。私は私なりに、日本の原風景にマッチするメロディーラインと言うものを日ごろから意識しており、無数に浮かんだメロディーの中から、自分なりの典型的なパターンをまず選び、そこから細胞分裂のように、モチーフを発展させました。

#### 2. 鳥の舞

残念ながら、鳥たちとは逢えなかったのですが、それはかえって私の想像を刺激しました。私の作りは邦楽と一番近いフリギアという協会旋法によっていますが、そういう古代的な音階こそが、未来の邦楽のはばたきになるとしています。[CD：福島潟讃歌より]